大崎下島大長方言の農業従事者の風位語彙について

岩城裕之　室山敏昭

1　はじめに

「内海文化研究紀要」第12号において、大崎下島大長の農業従事者がデサク（渡り作とも）を行っているという点に注目し、漁業従事者にとどまらず農業従事者の風位語彙の体系の解明をも行っている。そして、それが漁業従事者の体系の細かさに近いことを指摘し、その理由を、農業従事者の「渡り作」によるものとの見通しをたてている。

しかし、同一集落内に漁業従事者と農業従事者が暮らしているために、両者の交流の中で農業従事者が風位語彙を獲得していったと考える事もできるのである。また、「渡り作」が農業従事者の風位語彙に密接に関係しているとすれば、その行き先によって所有する風位語彙の体系が異なっていることも考えられる。

本論文では、「渡り作」に焦点を当てながら、当該地区の農業従事者の風位語彙の全容の解明を行おうとするものである。その手順として、第一に、大崎下島に豊島をはさんで隣接する上蒲刈島宮盛の農業従事者の風位語彙と比較する。大長同様、柑橘栽培を中心とする農業を主な生業としており、なおかつ同一集落内に漁業従事者を抱えているという点において共通する集落である。この両地点の比較によって、漁業従事者との交流による風位語彙の獲得の可能性を検証できる。第二に、「渡り作」の行き先によって所有する風位語彙が異なるかどうかの検証を行う。以上の観点から、論を進めていくこととする。

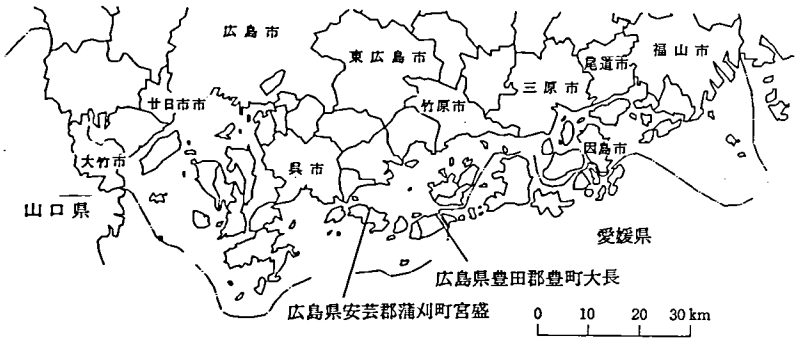
なお、人の認識とことばの問題については、一般に「サピア・ウォーフの仮説」と呼ばれる言語相対説を前提とし、さらにそれを補強した室山敏昭の生活語彙の論理に依拠している。

2　調査の概要

2.1　調査地点

広島県豊田郡豊町大長（大崎下島）　　オーチョー

広島県安芸郡蒲刈町宮盛（上蒲刈島）　　ミヤザカリ



大長、宮盛は、ともに柑橘栽培を中心とする農業集落である。しかし、大長には「渡り作」という習慣がある。「渡り作」とは、周辺の島に畑を持ち、そこまで船で耕作に通う事である。

2.2　調査方法

方位を挙げ、それに対応する風の名称を聞いていく質問調査を主とした。なお、「内海文化研究紀要」第12号の過去の大長での調査結果を参考に用いた。

2.3　方言話者

農業従事者で、70歳前後の外住歴の少ない人、各四名。男女については、予備調査の段階で差がないことが確認されたため、問わなかった。大長では男性3名、宮盛では2名である。

2.4　調査日時

調査日時　1993年9月～12月（延べ20日）

3　農業従事者の風位語彙の実態と構造

3.1　大崎下島大長の風位語彙の全容

4名の教示者を得た。4名の「渡り作」の行き先は、過去・現在にわたって以下の通りである。

A　大崎上島外表、大崎町

B　大崎上島沖浦、愛媛県横島

C　大崎上島大串（大崎町）、愛媛県岡村島

D　中島、大崎下島沖友

場所については、図1を参照されたい。

この4名については個人差が大きく、大長の農業従事者の風位語彙といった時、どこに標準を求めるかが問題となってくる。が、ここでは、便宜的に大長の農業従事者から得られたすべての語の総和を「大長の風位語彙」とする。以下、得られた事象と土地の人の説明を挙げていく。なお、【】内には可能な範囲での（辞書等で確認できる範囲での）現代語訳を掲げた。文例、説明は○印の後に掲げ、（）内には共通語訳を記した。なお、所々にみられる｛｝で閉じた部分は、筆者の補いや注である。

〈北〉

キタ【北｛風｝】　秋から冬にかけて。強く冷たい風。大崎上島へ渡って、帰るとき、弱い北風なら良いが、強いと海が荒れ、良くない風。海が荒れる。

○オーサキノ　ホーエ　イッタ　ヒトガ　カエル　トキニワ　ホー　マイテ　ムカシノ　ヒトワ　カエリョッタケン　ネー。ソン　トキニ　キタガ　フイトッタラ　ホー　マイテ　ロー　オサント　カエラレヨッタケン　ネー。（大崎｛上島｝のほうへ行った人が帰る時には帆をまいて、昔の人は帰っていたからねえ。そのときに北｛風｝が吹いていたら帆をまいて、櫓を押さなくて帰ることができていたからねえ。）

○ユーガタカラ　キタガ　ワリニ　ヨー　フキョッタンデス。アキン　ナッタラ　ネ。ホーカラ　アキニワ　フネ　ホーマイテ　カエッタリ　シヨリマシタ　ネ。（夕方から北｛風｝がわりに

よく吹いていたのです。秋になったらね。だから、秋には船に帆をまいて帰ったりしていました。)
○フユデス　ネ。({吹いてくるのは} 冬ですね。)
○サムヤ　キタカゼ、ツメタヤ　アナジ。(寒や北風、冷たやあなじ。)
○キタン　ナッタラ　エカッタ　ケド、ナダガ　ヒドー　フイタラ　ナミガ　ネー、ヨコナミクーヨーナカッタワイ　ネ。({大崎上島から大長へ帰ってくるのに} 北風になったら {帆走するのに} よかったけれど、強く吹いたら、灘が {荒れて}、横波を受けるようだったねえ。)
○キタカラ　マトモダッタラ　タダ　キタ　ユーワイ　ネ。(北からまともに来る風なら、ただキタと言いますね。)
アキギタ【秋北 {風}】　秋の北風。聞くことは聞く。
アサギタ【朝北 {風}】　夏頃。夜はマジ (南西の風)。9月頃。
ヨギタ【夜北 {風}】　夜吹く北風。
オーギタ【大北 {風}】　9から 10 月。強い風。大崎上島へ行くには櫓船では困難。
○ローセンデワ　ナンギスル　カゼ。(櫓船では難儀する風。)
○オーギタノ　アサッテガ　アメ。(大北 {風} の明後日は雨。コチが吹くとよく雨が降るが、オーギタの場合も明後日は雨になる。)
○キタガ　ガイニ　フイタラ、テンキガ　ヤッパリ　クダリザカン　ナル。(北風が強く吹いたら、天気がやっぱり下り坂になる。)
○ハシラナミン　ナルケン　ネ。({大北風が吹くと海が荒れて} 柱波になるからねえ。)
アオギタ【青北 {風}】　オーギタと同じ。海が青く見えるからアオギタという。

〈北東〉
キタゴチ【北東風】　昔は台風の風。冷たい風。雨が降る。
○キタゴチワ　ツメタインヨ　ネー。マー　アレガ　フイタラ　アメガ　ホンマニ。(北東風は冷たいのよねえ。まあ、あれが吹いたら、雨が本当に {降ってくる}。)
○ヤッパリ　ヒガシガ　ツクケン　ネー、アンマリ　オーキイ　ナミジャ　ナイ　ワケ　ヨ。ニシトカ　アナジター　チゴーテ　ネ、ナントモ　ナー　ワシラ　フネ　ダスワケ　ヨ。ナダガセマーケン　ノ。({キタゴチという名称には} やっぱり東がつくからねえ、あまり大きい波ではないわけだよ。西 {風} やアナジ {北西風} とは違ってね、{海は} 何ともない、私たちは船を出すわけだよ。{八木灘は} 灘が狭いからね。)

〈東〉
コチ【東風】
○コチ　ユー　モノワ　モンスゴイ　ヨー　フイトッテモ　ネー、パタット　ナグ　コトガ　アルンジャ。カナラズ　アメガ　チカイ　ノ。(東風というものはものすごく良く吹いていてもねえ、ぱたっと凪ぐことがあるのだ。{そうなると} 必ず雨が近いな。)
○シェキゼンノ　ホーデワ　コレ　ヒロイカラデモ　アルンダガ　ネー、コッチデワ　コチガ

フイテデモ　コー　ナニシタリ。コー　ヒーロカロー。カゲン　ナル　モノガ　ナイケン　ネー。イマノ　ウラエ　マワル、マエニワ　カイガンノ　ドーロガ　ナカッタケン、ワシラノ　ワカイ　トキニワ　ヨ、コッチー　デテ　ザワザワ　シダスト　ミタライエ　マデ　フネー　マーストカ　コッチー　カエルトカ。イマワ　ドーロガ　ツイトル。(関前の方では、これ、{灘が} 広いからでもあるんだがねえ、こちらではこう、{海が荒れたり} する。こう、{灘が} 広いだろう。陰になるものがないからねえ。今の、裏へまわる、前には海岸の道路がなかったから、私たちの若いときには、こっち {関前灘のこと} へ出て、{風が} ざわざわし始めると御手洗へまで船をまわすとか、こっち {大長のこと} へ帰るとか {していた}。今は道路がついている。)

オーゴチ【大東風】　昔の人は言っていた。

ドヨーゴチ【土用東風】　夏の土用の頃吹く。イギスという海草が生える。これで豆腐を作ったりしていた。

○ダイタイ　ナツヨ　ネー。({土用東風が吹くのは} だいたい夏よねえ。)

○ナツニ　アレガ　ネー、ドヨーゴチガ　フクト、ヨー　イギスー　ユー　カイソーガ　ネー　ハエルンデス　ワ。コチガ　オイートキニワ　ヨー　イギス　ユー　カイソーガ　ネー。(夏にあれが、土用東風が吹くと、よくいぎすという海草が生えるのです。東風が多く吹くときには、よく、いぎすという海草がねえ {生えるのです}。)

○ドヨーノ　アイダワ　ネー、アマリ。ドヨーガ　サメタラ　アノー　ヨー　フクンヨ　ネ。ホデ　アキノ　ドヨーデモ　ドヨーガ　サメン　ウチニ　イテ　ミナ　アノー　ワタリー　イクニャー　ネー、イモ　ツクッタリ　シヨルゴロワ　ドヨーガ　サメタラ　ウミガ　アレルケン　ユーテ　ネ、ヨー　ドヨーガ　サメン　ウチニ　ホッテ　コーデ　ユーテ　アレ　シヨッタ。(土用の間はね、あまり {風は} 強くない。土用が終わったら、あの、よく {強く} 吹くのよね。そして、秋の土用でも、土用が終わらないうちに {畑に} 行って、渡り作に出かけるには、芋を作ったりしているときは、土用が過ぎたら海が荒れるから、といって、よく、土用が過ぎないうちに {芋を} 掘って来ようよ、といって {渡って} いた。)

タトエゴチ【湛え東風】　満潮で吹く。潮が引き始めると強い。大崎からの帰路が楽。雨を伴う。

○マンチョーノ　トキヤナンカニ　フイタラ　タトエゴチジャ　ユーワイ　ネ。ガイニ　フイタラ。(満潮の時などに {東風が} 吹いたら、たとえ東風だと言いますね。強く吹いたら。)

○シオガ　サゲタラ、ヒキダシタラ　カゼガ　ツヨー　ナルンヨ　ネ。(潮が下げたら、引きはじめたら風が強くなるのよね。)

○タトエゴチ　ユーノガ　ソガーナ　トキニ　シオー　ミテ、コチダッタラ　オイカゼン　ナッテ　モドル　トキガ　ラクナンヨ　ネ。(たとえ東風というのがそんな {に吹き始めた} 時に潮をみて、東風が吹いていたら追い風になって {木江から} 戻るときが楽なのよね。)

○アメガ　フルトキニ　ネー、ヨー、タトエゴチカラ　アメガ　フルトカ、アー　ユーヨーナ　コトオ　ムカシノ　ヒトワ　イヨリマシタ　ネー。(雨が降るときに、堪え東風から雨が降るとか、ああいったことを昔の人はよく言っていたねえ。)

○アキダトエ、ハルビヨリ (秋の満潮から雨、春は干潮から {雨が降る}。)

ノボリ【のぼり】　聞いたことはある。
○コチケートーノ　コトオ　ユーンダロー　オモウンジャガ　ネ。クダリザカンナルトキニ　ノボリカゼジャ　ユータリ　シヨル。(東風系統のことを言うのだろうと思うのだがね。{天気が}下り坂になるときにのぼり風だと言ったりしている。)
マゴチ【真東風】真東の風。

〈南東〉
ナントー【南東{風}】
ヤマジゴチ【やまじ東風】　雨を伴う。
○ヤマジゴチ　フイタラ　ダイタイ　アメ。(やまじ東風が吹いたら大体雨{が降る}。)
○コチカラ　ヤマジエ　ナッタラ　ネ、アメガ　チカイ。(東風からやまじへ変わったら、雨が近い。やまじ東風は、その変化の中間にあたる。雨が近い。)
ミタライゴチ【御手洗東風】　知らないが、やまじ東風のことと思われる。
○ミタライガ　ソコジャケン　ソコノ　ホーカラ　コー　クルノオ　ミタライゴチジャ　ナイカイ　ネ、シランデ。(御手洗がそこ{大長の南東}だから、そこの方からくるのを御手洗東風ではないのかね。{御手洗東風は}知らないよ。)

〈南〉
ミナミカゼ【南風】
ヤマジ【やまじ】　暖かい風。
○ヤマジワ　キョーワ　ヌクイ　ドー。(やまじは、今日は暖かいぞ。)
○フイタラ　ガイナ。(吹いたら強い。)

〈南西〉
ナンセ(シェ)ー【南西{風}】
マジ【まじ】　暖かい。午後から吹くことが多い。一日で凪ぐ。
○サイキンワ　ネー　モー　ホトンド　ナンセーノ　カゼデス　ネー。タイフーワ、マジノカゼ。ワシラ　コドモノ　コロワ　ダイタイ　ホクトーノ　カゼガ　フキヨッタンデスケンド　ネー。ホーシテ　ネー　コンダー
カワセー　ユーノガ　マジカ　ニシカガ　フキョーッタンデス。(最近はねえ、もう、ほとんど南西の風です。台風{の風}は、まじの風。私たちが子供の頃は、大体北東の風が吹いていたのですけどねえ。そうして、こんどはかわせ{の風}というのが、まじか、西{風}が吹いていたのです。)
○マジガ　フイタラ　アタタカイ。(まじが吹いたら暖かい。)
○サムヤ　キタカゼ、ツメタヤ　アナジ。ワシガ　オモウワ　マジガ　ヨイ。(寒や北風、冷たやあなじ。私が{吹いてほしいと}思うのはまじがよい。)

○ヌクイ。(暖かい。)
○マジノ　カゼワ　ヒイッパイ　ユーテ　イチニチ　フイタラ　イッパイダ、モー　バンニワ　ナグ　ユーテ　ネ。(まじの風は日いっぱい、といって、一日吹いたらもう晩には凪ぐ、といってね。)
○ホデ　ガイナカッタラ　イマ　マジ　ガイナケン　ダスマーデ、アノ　ヒイッパイデ　バンニワ　ナグケン　ユーテ　ナーデ　カエルトキモ　アッタワイ　ネ。(そうして、{まじ} 強かったら、今まじが強いから {船を} 出すまいよ。あの、日いっぱいで晩には凪ぐから、と言って、凪いでから帰るときもあったわね。)
○ムカイカゼン　ナルケン　ナーデ　カエランニャー　ガイナンヨ　ネ。(向かい風になるから凪いで帰らないと大変なんだよね。)
○ヤマニ　オッテネ　ワタシラノ　ヤマガ　マジガ　マアテノ　ヤマガ　アルケン　ネー、アッコカラ　タカーホーノ　ヤマジャケン　ボーシモ　カズイトラレンヨーニ　フクトキガ　アルンヨ　ネ。マジガ。(山にいてね、私たちの山がまじが直接当たる山があるからね、あそこから高い方の山だから帽子もかぶっていられないように吹くときがあるのよね。まじが。)
○ミカンガ　ハチマキン　ナルンヨ　ネ。({まじ当ての山だから} 蜜柑がはちまきに {実が擦れて真ん中が茶色くなること} なるのよね。)
○マジガ　ツヨー　フイテモ　ワシラ　ゼンゼン　オソリャーセン　ヨ。(まじが強く吹いても、私たちは全然恐れはしないよ。)
○マジダッタラ　ムコーカラ　カエルンジャケン　マトモニ　ウケテ　カエル　ワケ　ヨ。ピシャーン　ピシャーン　ピシャーン　ピシャーン、モンスゴイ　カブルンジャ　ノ　ナミオ。ネンニイッカイカ　ニカイカ　アッタ　ノ。({吹いているのが} まじだったら、向こう {大崎上島} から帰るのだからまともに受けて帰るわけだよ。ぴしゃーん、、ぴしゃーん、ぴしゃーん、ぴしゃーんと、ものすごくかぶるのだな、波を。{そういうことが} 年に一回か二回かあったな。)
○マジデモ　ネ、ソガーニ　ガイニ　フカンケン　ネ。(まじでもね、そんなに強くは吹かないからね。)
オーマジ【大まじ】　強い。台風の時の風に多い。昔は台風といえばコチだった。
○ネトカラ　キガ　トンダ。マアテジャケン。({台風の時の大まじで} 根から木が飛んだ。{まじに対して} 真当て {の畑} だから。)
ヨマジ【夜まじ】　微風。夏の土用の頃よく吹く。翌日は晴れることが多い。
○ナツノ　ドヨーノ　コロ　ヨー　フキマス　ネー。(夏の土用の頃よく吹きますねえ。)
○ビフーガ　ネー。({強くないが} 微風がねえ。)
○ヨマジジャケン　アシタワ　ヒヨリジャワイ。(夜まじだから明日は晴天だ。)
サクラマジ【桜まじ】　3月に桜が咲く頃にはよくマジがふく。
○ユーノガ　ネー、サクラジキニワ　マジガ　フクンデス　ワ。({3月頃のまじを桜まじと} 言うのはねえ、桜の {花の咲く} 時期にはまじが吹くのです。)
○ダイタイ　イママデ　キタガカッタ　カゼガ　オーカッタンデスガ　ネ、トコロガ、サクラマ

ジユーテ　アタタカクナッテ　サクラガ　サクゴロニナッタラ　マジガ　フク　ユー　コトナンデス。ジキテキニ　ソー　ヨーン　ナル。(大体、今まで北がかった風が多かったのですがね、ところが、桜まじといって、暖かくなって桜{の花}が咲く頃になったら、まじが吹くということなのです。時期的に、よくそのようになる。)

タカマジ【高まじ】　強い。「高い」は強いこと。なお、C氏の回答である。

ハエ【はえ】　寒い風と暖かい風の変わり目。南西。西にずれることも。強い。海が青く見える。海が荒れる。突風。

○ワータヨーニ　クル。({風が突然}湧いたようにくる。)

○ナギノヨーナカッテモ　ネ、コノヘンガ　ソバエーデモ　ヨソガ　ソバエタラ　ネー、ワーット　ネー、ワータヨーニ　アノ、オトー　タテテ　クルワイ　ネ。ホータラ　ウミガ　モノスゴイ。マッサオンナッテ　ネー。(凪のようでもね、{自分のいる}このへんが荒れなくても、よそが荒れたら、わーっと、湧いたように、あの、音をたてて来るのよね。そうしたら海がものすごく{荒れる}。真っ青になってね。)

○フネノ　ウエニ　アタマバッカリ　ナミガ　イッテネ。(船の上を波がいってね。)

○ウミガ　チョット　ソバエタラ　アラー　ハエデー　コリャー　デマーデー　アブナイケン。ジコニ　アウンヨ　ネ。(海がちょっと荒れたら、あら、はえだぞ、これは。{海に}出るまいよ、危ないから{という}。{こういう時に出ると}事故にあうのよね。)

〈西南西〉

タカマジ【高まじ】　A氏の回答。マジよりも少し北寄りの風。

○タカイ　ユー　コトワ　ネー、ハヨ　ユータラ　キタヨリナンデス　ヨー。({タカマジの}高いということはねえ、簡単に言えば、北寄り{ということ}なのですよ。)

〈南西〉

マジニシ【まじ西】

○ホクシェーダト　チト　ズーット　カミニ　ノボッテ　ノ、サゲテ　モドル　トキニワ　フネガ　トモニ　ナッテ　ヤリヤスイ　ワケ　ヨ。マジニシ　ユータラ　ネー　マトモニ　コー　イカント　イケン　ノ。カエルンダッタラ　オーサキノホー　カエルンダッタラ　アンガイ　アナジノ　ホーガ　カエリヤスイ。(北西の風{が吹いているとき}だと、ちょっと、ずっと東のほうに上って{いって}ね、{そこから}西へ下って{大長の方向へ}戻るときには、船が{風向きと}追い風になって{帰るのに}やりやすいわけだよ。まじ西だったらねえ、まともに{向かい風になって}いかないといけないな。帰るのだったら、大崎{上島}のほう{から}帰るのだったら、案外、あなじのほうが帰りやすい。)

〈西〉

ニシカジェ【西風】　梅雨や秋口。フユニシはない。

○キタガ　フク　マエニ。(西風は北が吹く前｛の時期｝に吹く。)
ゴガツノタニシ（タニシとも）【5月の田西｛風｝】　西が強い。雨が降る。5月頃。ハエが吹く頃。
○ゴガツニワ　タウエー　ハヨ　ジュンビ　シトケ　ヨ。アメ　フルドー　ユー　コトナンデス。（5月には田植えを早く準備しておけよ。雨が降るぞ、ということなのです。）
○カミジマイッタラ　ダイショー　アル。（｛大崎｝上島へ行ったら｛田は｝大小ある。）
○ニシガ　ガイニ　フイテキテ　ネー、マックラン　ナッタリ　シタラ　アメガ　ヨー　フッテクルン　タニシジャー　ユーンヨ　ネー。(西が強く吹いてきてねえ、真っ暗になったりしたら雨がよく降ってくるのを田西だと言うのよねえ。)

〈西北西〉
ニシアナジ【西あなじ】　強い。海が荒れる。
○ニシガカットルガ　コリャー　マトモナ　アナジジャ　ナー　ネー、ニシモ　カカットル。（西がかっているが、これはまともなあなじではないねえ。西がかっている。）

〈北西〉
ホクセー【北西｛風｝】　海がよく荒れる。
○ホクセーガ　ダシニクイ。(北西｛の風が吹くと、船を｝出しにくい。)
○ホクシェーダト　チト　ズーット　カミニ　ノボッテ　ノ、サゲテ　モドル　トキニワ　フネガ　トモニ　ナッテ　ヤリヤスイ　ワケ　ヨ。マジニシ　ユータラ　ネー　マトモニ　コー　イカント　イケン　ノ。カエルンダッタラ　オーサキノホー　カエルンダッタラ　アンガイ　アナジノ　ホーガ　カエリヤスイ。(北西の風｛が吹いているとき｝だと、ちょっと、ずっと東のほうに上って｛いって｝ね、｛そこから｝西へ下って｛大長の方向へ｝戻るときには、船が｛風向きと｝追い風になって｛帰るのに｝やりやすいわけだよ。まじ西だったらねえ、まともに｛向かい風になって｝いかないといけないな。帰るのだったら、大崎｛上島｝のほう｛から｝帰るのだったら、案外、あなじのほうが帰りやすい。)
アナジ【あなじ】　秋から冬にかけて。強く、冷たい風で、海が荒れる。アナジが吹くと、フェリーも欠航する。特に、明石（大崎上島・木江町の地名）付近の海上が荒れる。船を出すには良くない風。
○アナジノ　ヨーカブキ。(あなじの8日吹き。)
○オーサキエ　ワタッテ　イカレンノヨ　ネ。ソレガ　フキダシタラ　ヨーカカングライ　ヤマンノヨ　ネ。(｛あなじが吹くと｝大崎上島へ渡って行かれないよね。それが吹き始めたら8日間くらい止まないよね。)
○ヒドイ　コトガ　アルデ。イチネンニ　イッペンカ　ニヘンカ　アル　ワ。デラレンノ　ヨ、ムコーエ　ムケテ、ヤギナダエ。(｛あなじが｝ひどいことがあるよ。一年に一度か二度かあるよ。｛大崎上島から｝出られないのよ、向こうへ向けて、八木灘へ。)

〈北北西〉

キタアナジ【北あなじ】　寒い。冬の間。海が荒れる。

○アナジト　キタガ　イッショニ　クルヨーナノオ　ユーンヨ　ネ。（{北あなじというのは}あなじと北が一緒にくるような風を言うのだよ。）

○サブインヨ　ネ。（{あなじは}寒いのよね。）

○キタガ　ガイナカッテモ　イカン、アナジガ　ガイナカッテモ　イカン。（{大崎下島へ渡るには}北が強くても良くない、あなじが強くても良くない。）

方位限定なし

ハヤテ【はやて】　梅雨の時期。突風。方位の限定は特にない。

○アリャ　ネー　キューニ　クルワケ　ヨ　カゼガ。ホンデ　ツユニ　クルンジャ　ツユニ。カゼガ　フキヨランカッテモ　バッート　クル　コトガ　アルンジャ。ツユ　ジブンニ。（あれはねえ、急に来るわけよ、風が。そして梅雨に来るのだ。梅雨に。風が吹いていなくてもばーっと来ることがあるのだ。梅雨時分に。）

○マジガ　フイタリ　ニシガ　フイタリ　ワカラン。（まじが吹いたり、西{風}が吹いたりわからない。）

○アノ　ゴロワ　ダイタイ　ネー　マジノ　カゼガ　オイー　オモウ　ヨ。ヌクイ　トキジャケン。（{はやてが吹いてくる}あの頃は、大体ね、まじの風が多いと思うよ。暖かい時期だから。）

フキオロシ【吹きおろし】

○フキオロシワ　キクケド　ネー。ドノ　カゼデモ　アルワケ　ヨ。ヤマカラ　コー　オリテクル　コトー　ユー　ワケ　ヨ。（吹きおろしは聞くけどねえ。どの風でもあるわけよ。山から、こう、下りてくることを言うわけよ。）

ハルイチバン【春一番】　まじが多い。

○ハルイチバンワ　ネ、ヒドインヨ　ネ　カゼガ。（春一番はね、ひどいのよね、風が。）

○マジガ　オーイ　ネ。（{春一番は}まじが多いね。）

ツムジカゼ【つむじ風】　強い。風向きが変わる。

カワセ【かわせ】　台風の時に多い。風向が突然変わる。5月頃に吹くことも。

○サイキンワ　ネー　モー　ホトンド　ナンセーノ　カゼデス　ネー。タイフーワ、マジノカゼ。ワシラ　コドモノ　コロワ　ダイタイ　ホクトーノ　カゼガ　フキヨッタンデスケンド　ネー。ホーシテ　ネー　コンダー

カワセー　ユーノガ　マジカ　ニシカガ　フキョーッタンデス。（最近はねえ、もう、ほとんど南西の風です。台風{の風}は、まじの風。私たちが子供の頃は、大体北東の風が吹いていたのですけどねえ。そうして、こんどはかわせ{の風}というのが、まじか、西{風}が吹いていたのです。）

得られた事象について、土地の人の一つ一つの説明を統合し、意味枠を設定した。これを表の

最上段に掲げる。なお、意味枠の最後に「生活意味」が挙がっているが、土地の人の風に対する評価、という意での「生活意味」である。大長の風位語彙については、表1として掲げる。

3.2 上蒲刈島宮盛の風位語彙の全容

先の大長と同じく4名の教示者を得た。4名とも農業従事者で、柑橘栽培に従事していた。

先と同様の手続き、記述方針で、風位語彙の実態を以下に記述する。

〈北〉

キタカゼ【北風】 ○サムヤ キタカゼ ツメタヤ アナジ。

○フユノ オモデス ノー。(冬の主な風ですねえ。)

○サブイノワ。(寒いのは {北風だ}。)

オーギタ【大北 {風}】 強い北風。

アキギタ【秋北】 晴天になる。

〈北東〉

キタゴチ【北東風】 冷たい風。寒いので良くない。蜜柑をとる頃。

○カイソーノ ヨルノデ シッチョル。(海藻が {岸に} 寄るので知っている。)

〈東〉

コチ【東風】 雨が近い。あまりよくない風。

○コチノ スダレワ アメトナル。(東風の翌翌日は雨となる。)

ドヨーゴチ【土用東風】 波のうねりが大きい。船乗りから聞いた。夏の土用のころは暑い。しかし、東風が吹いてくると涼しく、過ごしやすい。

○モシェガ アガル。ソレオ ヒライニ イク。ヤマノ ナイ モンガ。(岸に藻が上がる。それを拾いに行く。山のない者が。)

○コチニ アメ、クソニ ションベン。(東風に雨、糞に小便。{糞をするとき必ず小便を伴うように、東風は雨を伴う、の意})

○アサゴチ ヒルカラマジ

オーゴチ【大東風】 聞いたことがある。

ミタライゴチ【御手洗東風】 ○マシマノ オキー トーッタラ ヒヨリ。コチガ フクト ウミガ アオイ。({御手洗東風} が松島の沖を通ったら {翌日は} 日和。この {東} 風が吹くと海が青い。)

〈南〉

マジ【まじ】 南風。春に多い。6月頃のマジは芋の苗を枯らすほど強い。

○マジノ カゼワ ヒイッパイ。(まじの風は日いっぱい {で止む}。)

サクラマジ【桜まじ】
○ヌークイ　カゼ。マジガ　フキダータケン　メガ　デタ。(暖かい風。まじが吹きだしたから芽が出た。)
ヤマジ【やまじ】　大風。台風の時、コチからヤマジを経てキタの風になる。被害が大きい。
○ミナミト　ニシト　カカットル。(南と西と混じっている。)
○ツヨイデス。イチバン　ツヨイ。(強いです。一番強い。)
○イエガ　コケアガル。(家が転け上がる。{倒れる、ということ})
○ニシガ　フキョーッテ　ヤマジニ　カワスト　ヒガイガ　アル。(西が吹いていて、{西風が}やまじ{の方向}にかわすと、被害がある。)
オーヤマジ【大やまじ】　ヤマジの特に強い風。
デアラシ【出あらし】(ジアラシとも)　朝の風。山の方から吹いてくる。アサマジと同じ。
アサマジ【朝まじ】　○アサマジワ　ヒヨリノ　カミサン。
ヨマジ【夜まじ】　○ヒヨリ　ソコナイ。
トージンボー【とうじん坊】　ただし、由来を知っているのは原田氏のみ。
　麦を刈る頃の風。○ムギオ　コカス。

〈南西〉
マジニシ【まじ西】　聞いたことはある。

〈西〉
ニシ、ニシカゼ【西風】　島の裏側の海が荒れる。
ゴガツノ　サニシ【五月の田西】　五月の田西のことと思われる。田植えをしている頃吹いてくる強い風。雨を伴う。苗が植わらない。
○ゴガツノ　サニシニ　モドラヌ　フネワ　ドコノ　オヤマガ　トメタヤラ。船乗りの奥さんが言う。

〈北西〉
アナジ【あなじ】　小用の方から。下からすくい上げるように吹く。
○アナジガ　フルケン　サムイ　ノー(祖父)　海が荒れる。
○サブヤ　キタカジェ　ミニシブ　アナジ。(寒いな北風は、身にしみるのはあなじだ。)

〈北北西〉
キタアナジ【北あなじ】　アナジと同じ。
〈方位不定〉
ハルイチバン【春一番】　春のはじめに吹く風。強い。南の方から。

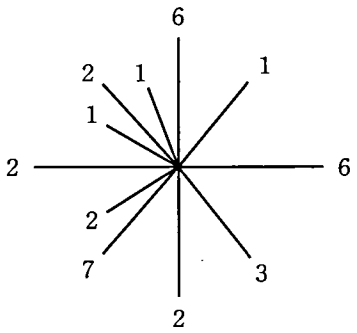
先の大長と同じ手続きで、得られた語形を一覧表の形で示したものを表2として掲げる。

4　両島の農業従事者の風位語彙の比較と解釈

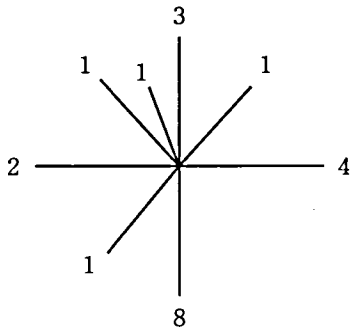
4.1　量的構造に着目して

全体の語数をみた場合、延べ語数も異なり語数も大長の方が多い。異なり語数では大長の農業従事者は宮盛のおよそ1．5倍である。延べ語数も大長の方が多い。

	大　長	宮　盛
の べ 語 数	81	60
異 な り 語 数	37	23



大長



宮盛

まず第一に方位の弁別ということに絞ってみると、宮盛は極端に南西から北東にかけての方位の弁別が細かくなっていることがわかる。大長もその傾向はあるが、宮盛は南東などの中間方位の弁別が全くなされていない点において、やはり顕著であると言えよう。また、方位別の語数を見ると大長では北、東、南西に特に栄えていると言える。宮盛では南が極端に多く、ついで東、北の順である。方位別の語数は両地点ともに傾向はほぼ同じである。

以上が事実の指摘である。

さて、この事実の解釈を行う前に、まず三つの柱を設定したいと思う。一つは生業（生業のありようも含む)、二つには自然環境、最後に社会環境である。以下、三つの柱を中心にしながら解釈を行いたいと思う。言うまでもなく、この3つの柱はそれぞれ別個に存在しているわけではなく、互いに関連性を持ちながら存在しているという前提のもとで、である。

ところで先に指摘した事実であるが、方位の弁別について、宮盛のそれは自然環境という柱によって解釈できると考える。宮盛は北向きの集落で、南西から北東にかけてが海の方向になる。一方、南は山になるが、小さい川があるために南はその谷筋となる。したがって南西から北東にかけて方位が細分化されている、と考えて良いであろう。

しかし、大長ではそうはいかない。大長は東向きの集落である。さらに、目の前の瀬戸は狭く、

小さい島もあり、風が吹きにくい環境である。大長の方位の弁別は宮盛と同じようには解釈できない。

大長で「キタゴチ」の説明を見ると、土地の人の次のような説明がある。

○ヤッパリ　ヒガシガ　ツクケン　ネー、アンマリ　オーキイ　ナミジャ　ナイ　ワケ　ヨ。ニシトカ　アナジター　チゴーテ　ネ、ナントモ　ナー　ワシラ　フネ　ダスワケ　ヨ。ナダガセマーケン　ノ。（{キタゴチという名称には} やっぱり東がつくからねえ、あまり大きい波ではないわけだよ。西 {風} やアナジ {北西風} とは違ってね、{海は} 何ともない、私たちは船を出すわけだよ。{八木灘は} 灘が狭いからね。）

ここでは、八木灘という、大長とは少し離れた海上の風を言っている。同じように、隣島の大崎上島木江町付近の海上の様子が意義特徴として挙がっている風もある。大長の人にとっての風は、大長集落そのものよりも、むしろその周辺の海上に視点を置いて捉え、名称をつけ、意味を焦点化しているような観がある。こう考えるならば、大長という集落の自然環境では解釈ができないことは説明がつこう。自然環境ということを考えるならば、それ以前に、生業によって規定された面がある、ということを考えねばなるまい。大長の人々にとっては、大長から離れた場所が風の認識の基準点になっている。自然環境は、大長から離れた基準点のそれを考えなくてはならないであろう。したがって、大長の風位語彙の解釈にあたっては、自然環境という柱は特に持ち込まないこととする。後に触れることになるが、それぞれの個人が「渡り作」で異なる場所に出かけており、それらを一括して論ずることができないからである。この項で指摘した大長の事実について、次のような解釈を与えておきたい。大長では宮盛と違い、大長という集落の自然環境では解釈ができないということ、その理由として、大長の農業従事者は「渡り作」を行うために、風を認識するその基準となる場所が大長の外にあったということが考えられる。

語数の多い方位とそうでない方位との関係についてはここでは解釈できそうにない。「語数が多い＝注目が集まる」とは単純にいかないからである。意味をも含めて考えなくてはなるまい。

4.2　意味からの比較

帰納された意味枠を見ると、両地点とも同じ意味枠であるが、意味枠内部を両地点で比較すると、微妙に異なっていることが看取される。

まず「強弱」についてであるが、「強弱」についての意義特徴が挙げられている場合、両地点とも「強い」という意義特徴が多く挙がっている。次に「季節」「時間帯」であるが、若干大長の方が月を指定してあるなどの細かさが見られる。「天候」についても、両地点ともに晴天よりは雨天の方が意義特徴に多く挙がっている。「寒暖」も「寒い」という意義特徴が多く挙がっており、農作業と雨天、寒さとの関連がここに現れたものと思われる。両者ともにあまり歓迎すべき事柄ではなかろう。その結果として注目が集まることになり、それに関する意義特徴が多く挙がったものと思われる。

大きく異なりが見られる意味枠として、まず、方位の特定を行っている「方位」の項目がある。ここでは、大長が「真東」「北がかる」のように東西南北の方位名で答えているのに対して、宮盛では「山から」などのように、具体的な物、あるいは場所をもって方位の特定を行っていることが知られる。ところで、風を観察する場所が変われば、「山から」といった方位の特定は意味をなさない。したがって、宮盛の方位の特定の態度は、基本的に宮盛という場所に観察点をおいていることがわかる。陸上視点の捉え方である。また、陸上視点にこだわれば「海の状態」の項目にもそれが伺える。大長では「海が荒れる」以外に、「潮が引くと強い」といった意義特徴が見られるが、宮盛では潮と関連させている意義特徴は見当たらない。「海が荒れる」「海が青い」といった、陸上から観察できる事柄が挙がっている。宮盛の風位語彙の意味構造を見ていくと、各々の語が陸上視点によって捉えられる事柄を意義特徴に持っている語が多いことがわかる。一方、そのような宮盛に対して、大長では大長以外の場所において捉えられる事柄を意義特徴として持っている語が幾つか見られる。例えば、大長の「キタ」は「八木灘が荒れる」風で、大長という集落には直接関係のない場所を荒らす風である。完全な陸上視点であれば、そもそもこのような風に注目することはないであろうし、「海の状態」にこのような意義特徴が挙がることは考えにくい。先の「方位」についても宮盛とは逆のことが指摘でき、大長において、風は、大長という集落のみに限定されない視点で捉えられているようである。

さて、最も重要な、風位語彙が土地の人々にとってどういう意味を持っているのか、ということを知るためには、それぞれの語が持っている「生活意味」を見ることが先決であろう。「生活意味」は土地の人の風に対する評価である。それぞれの語に見られる土地の人の評価は、その土地において、風位語彙が単なる知識として存在するのか、それとも生活の中で何か重要な意味を持っているのかを表している。先の問題も、ここでよりはっきりと見えてくるはずである。

「生活意味」について注目すると、非常におもしろいことがわかる。大長では教示者がすべて農業従事者であるにも関わらず、「帆走に危険」「船を出せない」といった意義特徴が多く見られるのに対して、宮盛では「麦を倒す」「被害が大きい」「苗が植わらない」などの意義特徴ばかりで、船に関するものが全く見られないのである。このことは、宮盛において風位語彙は農作業に与える影響、あるいは強い風による家屋倒壊など、陸上での農業と生活との関わりで捉えられ、使用されていることを示している。一方、大長では、農業従事者として「蜜柑づくりにはよくない」「畑に被害」などと共に、いや、むしろそれらは少数で、「船を出せない」といった意義特徴がかなり多く見られ、帆走との影響において風を捉え、それらを意義特徴として風位語彙が機能していることが伺える。ここに、宮盛の陸上視点に対し、大長の海上視点という風の捉え方の違いを看取できる。

社会環境ということでいえば、両集落ともに船に乗ることを本職とする、漁業従事者や船乗りがいる。そして、特にどちらかの集落が漁業従事者との交流が盛んということは確認できなかった。生活時間が違うので、あまり親しくない、という意見が多く聞かれた。また、漁業従事者は集落の中では少数で、それも集落の一部にかたまって暮らしている。両地点で大きく変わるところはないと判断される。にもかかわらず、このような差が現れることは、大長の農業従事者の

「渡り作」という習慣が大きく影響していると考えざるを得ない。生業という柱である。「生活意味」の項目で見られたように、まずは生業によって風の持つ意味合いが両集落で異なり、大長では「渡り作」による影響で風を捉え、宮盛では集落内の畑での農作業や生活による影響で風を捉える。その上で、大長付近の海上と宮盛集落という自然環境の差が、互いに両者の風位語彙の差を生み出していったと考えるのである。

さて、先に指摘した語数の多少と方位との関連について、ここで考察してみたい。

語数の多さということを、注目の強さということにすぐに結びつけるわけにはいかないであろう。注目の強さ、の内実が問題である。まず、生活に与える影響が好ましくなく、吹くと困るという点でいえば、大長の農業従事者は「アナジ」に注目を寄せていると考えてよいであろう。まず真っ先に危険な風と言えば「アナジ」なのである。土地の人の意味の説明にもそれが伺える。しかし、その方向の風は「ホクセー」「アナジ」の2語である。それに対して、「キタ」は語数が多い。北からの風を表すことばとして、「キタ」「オーギタ」「アオギタ」「アキギタ」「アサギタ」「ヨギタ」が挙がっている。うち、「キタ」は次のような風である。

キタ【北{風}】　秋から冬にかけて。強く冷たい風。大崎上島へ渡って、帰るとき、弱い北風なら良いが、強いと海が荒れ、良くない風。海が荒れる。

これを見ると、基本的に「キタ」は帆走に便利な風のようである。しかし、いったん強くなってしまうと危険な風になってしまう。そこで、「オーギタ」とを区別したと考えられる。

また、「キタ」は季節風の影響で秋から吹きはじめることが多く、そろそろ北風の時期だ、ということを共有認識とするために「アキギタ」が生まれたと考えられる。このように見ていくと、生活に対して完全にマイナスの影響を与える「アナジ」については派生語がなく、生活に対しての影響がプラスかマイナスかが転換する可能性がある「キタ」については派生語を生み出すという事実がここに見て取られる。注目、といっても、そこには様々なレベルのものがあることを見逃してはなるまい。なお、大長では他にも「マジ」などは「キタ」と同じ傾向がある。「サクラマジ」は北からの季節風が変化し、南になってゆく指標であり、「マジ」は暖かく強くないが、「オーマジ」になると帆走に支障をきたす。なお、北風では「ヨギタ」のように、なかにはなぜその語が生み出されたのか、はっきりとわからないものもある。そういう語は、ほとんどが意義特徴が貧弱な語である。土地の人にも、その風の持つ生活上の意味がわからなくなっているのだろうか。弁別の必要性が感じられなくなったということにつながりそうである。

5　大崎下島大長の風位語彙の個人差

5.1　量的構造に注目して

ここでは大長の農業従事者の風位語彙の個人差について考えてみたい。大長では各4名に調査を行ったが、それぞれが「渡り作」の行き先が異なっており、「渡り作」との影響関係で農業従事者の風位語彙が規定されるのであれば、ぜひとも注目しなくてはならない事柄である。まず、

4名の「渡り作」での行き先と地図を掲げる。

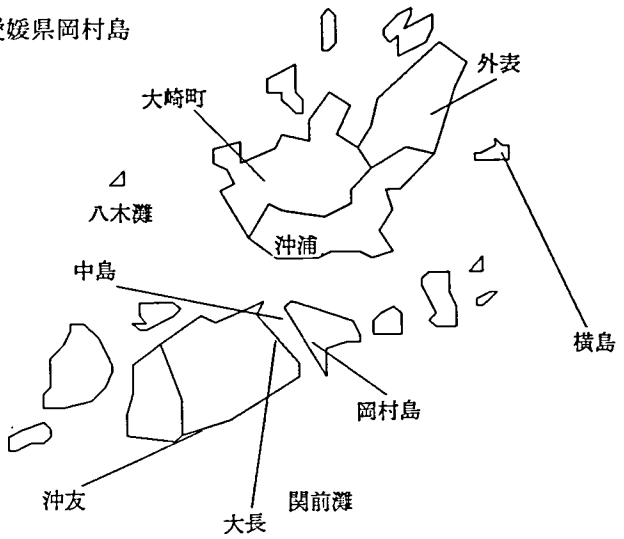
図1　渡り先および地図

A　大崎上島外表、大崎町

B　大崎上島沖浦、愛媛県横島

C　大崎上島大串（大崎町）、愛媛県岡村島

D　中島、大崎下島沖友



次に、得られた事象を語形のみに注目して整理すると、以下のようになる。

A/B/C/D	キタ、オーギタ、キタゴチ、コチ、マジ、ニシ、ゴガツノタニシ、アナジ、ハルイチバソ	9
A／B／C	ドヨーゴチ、ヤマジゴチ	2
A／B／　D	ヤマジ、ヨマジ	2
A／　C／D	ハヤテ	1
B／C／D	キタアナジ	1
A／B	タトエゴチ、ミナミ、ナンセー	3
A／　C	アサギタ、オーゴチ、タカマジ	3
A／　　D	0	
B／C	0	
B／　D	0	
C／D	0	
A	アオギタ、サクラマジ、ホクセー	3
B	アキギタ、マゴチ、ノボリ、ナントー、ミタライゴチ、オーマジ、ハエ、ニシアナジ、カワセ、ツムジカゼ	10
C	ヨギタ、マジニシ	2
D	0	

まず、全員が回答した語形には9語のうち6語が一次語である。しかし、三名以下の回答事象には性質呼称などを伴う二次的派生語が多いことがわかる。一次語を基本的部分と考えるならば、風位語彙の基本的枠組みは全員が共有していると考えてよいであろう。それ以上にさらに細分化して命名を行う場合に個人差が現れてきているのである。これまでに大長の農業従事者の風位語彙が、その量の多さ、構造の複雑さが「渡り作」によって支えられてきたものであることを述べ

てきたが、これを前提に考えると、それぞれの個人が自分の「渡り作」の必要性によって注目する風を細分化して捉えていった結果がここに現れたということになる。

語彙量についてみると、B氏の特有語彙が他に比べて多いことがわかる。B氏のみ女性である。この中に女性特有語が含まれている可能性も否定できなくはないが、渡り先が遠く、複数地点であることに注目したい。なお、全国の多くの漁業集落では、おおむね女性の風位語彙が貧弱で、男性のそれが豊富であることが指摘されている。漁業従事者ではなく農業従事者であるという違いはあるものの、少なくとも大長の農業従事者にはそれがあてはまらない。むしろ女性の方が多く所有している。いや、男女ともに同じように所有していると考えるほうが妥当であろうか。いずれにせよ、男女とも同じように「渡り」を行っていたことから、男女が同じような風位語彙を持つに至った、と解してよいだろう。ちなみに、宮盛でも男女で差はない。ここでは生業ということと密接な関係があるわけではないために同じようになったと解した方が良さそうだ。

さて、説明を元に戻し、D氏に注目する。渡り作を行わないD氏の特有語がゼロであることが重要であろう。またD氏は所有語数も13語と、最多のB氏の約半分で最も少ない。「渡り作」がひとつの鍵であるようだ。D氏は次のように言っている。

○ワシラ　アノー　カゼヤナンカノ　コト、フネー　ヤランカラ　ネー、ノッテ　シゴト　ムコー　イッタリ　スル　ヒトワ　キオツケテ　ネー、カゼガ　ドーヤラ　ヨー　イヨッタケド。ワシラ　アンマリ　トークエ　デンカラ。（私たちは、あの、風なんかのこと、船をやらないからねえ、{船に} 乗って仕事 {をしに} 向こう {大崎上島のこと} へ行ったりする人は気をつけてねえ、風がどうだと言ったりしていたけれど。私たちはあんまり遠くへ出ないから。）

注：船をやらない、というのは、船で遠くへ出ない、の意。

○ワシ　ミカンズクリデ　ネー、ソコ　カイソーテンノ　ネー、マエニ　コマイ　シマガ　アルンダガ　ナカジマダケン　ソコデテ　ツット、ナカダロー。（私は蜜柑作り {をやっていて} ねえ、そこ、回漕店 {現在、大長港のある場所} のねえ、前に小さい島があるのだが、{そこが} 中島だから、そこ {農用船の停泊している大長の堀のこと} をでて、つっと {すぐ行ったところだ}。{瀬戸の} 中だろう。{だから風にはあまり関心がない。}）

B氏は最多の27語を所有する。うち10語が、B氏だけの特有語である。一方、A氏とC氏はそれぞれ23語、18語を所有しているものの、一名だけの特有語の少なさが知られる。またA氏とC氏には共通事象が15語で、特にC氏はA氏と同じような語を所有していることがわかる。A氏とC氏の行き先が、ともに大崎上島南部であり、互いに似通っていることから説明できないだろうか。というのも、かつて櫓船で「渡り作」に出かけていたときは、ビンノリといい、誰かが船を出すとき同乗していくという習慣が広く行われていたためである。同じような場所へ向かう者は、特にお互いの交流が密であったと思われる。ビンノリについて、土地の人は次のように説明している。

○オーキナ　フネジャッタラ　ビン　モローテ　ネー。（{相手の船が} 大きな船だったら便を貰ってねえ。）＝ビンモライ

○ムカシワ　ネー、ヨッケ　ビンノリ　シテ　オッタ　ワ。オーサキエ　イキマショー　ユーテ　ネー、サンニンダケジャッタラ　ロー　オシテモ　エライデショーガ、ジップンカ　ジューゴフンカ　シタラ　コータイ　スルワケ　ヨ。ビンノリガ　オッタ　ホーガ　エカッタ　ユーワケ　ヨ。（昔はねえ、たくさん便乗りをしていたよ。大崎 {上島} へ行きましょう、と言ってね。{櫓をこぐのが} 三人だけだったら辛いでしょう、10 分か 15 分かしたら {櫓を押すのを} 交代するわけだよ。便乗りがいた方が良かったという訳よ。）

5.2　意味に注目して

以上は語形のみに注目してきたが、意味の個人差についても考えてみたい。各教示者から得られた結果を、意味枠を設定して一覧表の形にしたものを掲げる。（表３）

これまでに、語形に注目しその有無を見てきたが、ここでは、たとえ同じ語形でも挙がっている意義特徴が異なっていることがわかる。それも、生活意味にばらつきが多いように思われる。違いの要因には２つのものがありそうである。まず「コチ」である。注目すべき内容について例文も示しながら見ていくことにする。

A氏

○ウミワ　アレマセン　ノー。（海は荒れませんね。）

B氏

特になし。雨が近い。

C氏

○セマイデショー、ナミガ　ナインデス。（岡村島と大長の間の瀬戸は} 狭いでしょう。{東風が吹いても} 波がないんです。）

○コチ　ユー　モノワ　モンスゴイ　ノー　フイトッテモ　ネー、パタット　ナグ　コトガ　アルンジャ。カナラズ　アメガ　チカイ　ノ。（東風というものはものすごく良く吹いていてもねえ、ぱたっと凪ぐことがあるのだ。{そうなると} 必ず雨が近いな。）

三氏が東風を海への影響なしといっていたことに対して、一方、D氏は次のように答えている。

○シェキゼンノ　ホーデワ　コレ　ヒロイカラデモ　アルンダガ　ネー、コッチデワ　コチガ　フイテデモ　コー　ナニシタリ。コー　ヒーロカロー。カゲン　ナル　モノガ　ナイケン　ネー。イマノ　ウラエ　マワル、マエニワ　カイガンノ　ドーロガ　ナカッタケン、ワシラノ　ワカイ　トキニワ　ヨ、コッチー　デテ　ザワザワ　シダスト　ミタライエ　マデ　フネー　マーストカ　コッチー　カエルトカ。イマワ　ドーロガ　ツイトル。（関前の方では、これ、{灘が} 広いからでもあるんだがねえ、こちらではこう、{海が荒れたり} する。こう、{灘が} 広いだろう。

陰になるものがないからねえ。今の、裏へまわる、前には海岸の道路がなかったから、私たちの若いときには、こっち｛関前灘のこと｝へ出て、｛風が｝ざわざわし始めると御手洗へまで船をまわすとか、こっち｛大長のこと｝へ帰るとか｛していた｝。今は道路がついている。)

このように、東風に対してA～Cは海に影響はなく、困る風でないという捉え方であるに対して、D氏は東西に広い大長の南側の関前灘を通って沖友の畑に通っていた。したがって、東風に対しては危険であるという認識がある。渡りの行き先によって風に対する捉え方が異なる。風位語彙が「渡り作」に規定されていることの証明となろう。渡りの行き先によって風に対しての認識の仕方、捉え方が異なり、ことばの上にそれが現れたのであろう。ただ、これは「渡り作」と大長との位置関係によって決定される事柄である。

次に「マジ」についても見てみたい。B氏は次のように言っている。

○ヤマニ　オッテネ　ワタシラノ　ヤマガ　マジガ　マアテノ　ヤマガ　アルケン　ネー、アッコカラ　タカーホーノ　ヤマジャケン　ボーシモ　カズイトラレンヨーニ　フクトキガ　アルンヨ　ネ。マジガ。(山にいてね、私たちの山がまじが直接当たる山があるからね、あそこから高い方の山だから帽子もかぶっていられないように吹くときがあるのよね。まじが。)
○ミカンガ　ハチマキン　ナルンヨ　ネ。(｛まじ当ての山だから｝蜜柑がはちまきに｛実が擦れて真ん中が茶色くなること｝なるのよね。)

B氏の行き先は主に愛媛県横島である。小さい島のため、風が畑に直接影響を与えているようである。同じように、D氏は大長の前の瀬戸に浮かぶ小島に渡っているが、大きな地図には載らないほどのごく小さい島である。ここも、畑が直接風の影響を受けているようで、次のような教示がある。
○チョット　ミカンヤ　ナンカデモ　フユニ　サムイ　ネー、コッチノ　ブンワ　ハオ　オトスワイノ。キタガ　フクヨーナ　トコロワ、ナカジマ　ヨー　ハガ　モゲルトカ　ボーフーリンネー。(ちょっと蜜柑なども冬に寒いね｛時には｝、こっちの木は葉を落とすよね。北が吹くようなところは、中島などよく葉が取れるとか、防風林を｛植えたり｝ねえ。)

これは畑の位置の問題で、渡り先での問題であろう。

6　おわりに

第一に集落全体を対象に量的構造と意味的構造の二面から考察を加えた。「渡り作」を行っている大長と「渡り作」を行っていない宮盛の比較において、前者は生活意味に帆走への影響が多く挙がっている一方、後者は麦を倒すなどの、陸上での農業に関する生活意味が挙がっていた。「方位」の項などを見ても、前者は海上視点、後者は陸上視点ということで、基本的に機能が違うものと解される。つまり、大長では生業語彙の一として、宮盛では生業語彙という色彩よりも、むしろ自然環境語彙としての色合いが強いと言うことである。

いずれにせよ、二つの集落の比較において違いが見いだせたということは、大長の風位語彙が「渡り作」によって支えられていることがわかる。

また、個人差によってそのことがはっきりと指摘できる。行き先によって、それぞれの個人が別々の体系を所有している。基本的部分は重なるものの、二次的派生語において異なりが見られた。行き先と大長との位置関係、行った先の状況によって風への関心が異なり、それが語彙体系の上に反映しているということである。

「渡り作」を手がかりにすれば、農業従事者の風位語彙の研究も行える。「渡り作」を行っている地方は全国に数少ないということであるが、たとえば琵琶湖や浜名湖などではそれが行われているとの情報もある。内海と、湖沼との違いはあるのだろうか。

最後に、内陸部との比較も今後の課題としたい。「渡り作」を行わない宮盛であっても、内陸部と比べると、島であるという環境のために、内陸部の風位語彙よりもやはり密なのかどうか、という点を解明しておきたいと思うからである。漁業従事者、ということだけでなく、農業従事者の風位語彙にも目を向ける必要性を感じる。

参考文献：

室山敏昭「全国各地漁業社会の風位語彙資料」(『広島大学文学部紀要』第43巻特輯号2、1983)
野林正路『意味をつむぐ人びと　ー構成意味論・語彙論の理論と方法ー』(海鳴社、1986)
室山敏昭『生活語彙の基礎的研究』(和泉書院、1987)
柴田　武『語彙論の方法』(三省堂、1988)

付記：本論は、平成5年度に岩城が本学教育学部に提出した卒業論文の要旨をまとめ、加筆したものである。

表1　大長の風位語彙

語　形	強弱	季節	時間帯	方位	高度	天候	寒暖	海の状態	生活意味
キタ	強い	秋～冬	夕方				寒い	八木灘が荒れる	帰路、帆走可 船を出せない 蜜柑作りにはよくない。
オーギタ アオギタ アキギタ アサギタ ヨギタ	強い 強い	9～10月 9～10月 秋 9月頃	早朝 夜			雨が近い	寒い	荒れる 海が青い	船を出せない
キタゴチ	強い					台風、雨	寒い	荒れる	昔は危険な風。
コチ オーゴチ ドヨーゴチ タトエゴチ マゴチ ノボリ	強い 強くなる 強くなる	夏の土用		真東		凪ぐと雨 雨が近い		後に荒れる 潮が引くと強	関前灘が荒れる 沖友へ行けない 恐ろしくない 船を出せない 追い風になる。
ナントー ヤマジゴチ ﾐﾀﾗｲｺﾞﾁ	強くない					雨が近い 台風に多			大崎上島へは、追い風
ミナミ ヤマジ	強い	春							
ﾅﾝｾｰﾉｶｾﾞ マジ ヨマジ サクラマジ オーマジ ハエ タカマジ	微風 強い 強い 強い	春～秋口 夏の土用 春～秋口 桜の時期 5月	一日で凪ぐ 午後に多い 夜 一日で凪ぐ	西 ～南西		翌日晴天 季節風の変化 変化	暖かい 暖かい	荒れる 海が青くなる	向かい風だが、恐れはしない 畑に被害。 帆走も危険。 危険。
タカマジ マジニシ				北がかる					大崎上島からの帰路は向かい風
ニシ ｺﾞｶﾞﾌﾉﾀﾆｼ	強い	梅雨・秋 5月				雨を運ぶ	寒い		冬の西風は悪い 作業にはﾏｲﾅｽ 大崎上島では田植えの時期
ニシアナジ	強い							荒れる	
ホクセー アナジ	強い	冬 秋～冬	8日間続く				寒い	荒れる 荒れる	船を出せない 特に八木灘危険
キタアナジ		冬					寒い	荒れる	船を出せない
ハヤテ ﾊﾙｲﾁﾊﾞﾝ カワセ ツムジカゼ フキオロシ	突風 強い 強い	梅雨時期 春 5月・秋		マジ多し 西が多い マジ多い 風向変化 風向変化	山から	雨になる			危険

表2　宮盛の風位語彙

語　形	強弱	季節	時間帯	方位	高度	天候	寒暖	海の状態	生活意味
キタカゼ アキギタ オーギタ	強い	冬に多い 秋				晴天	寒い		
キタゴチ		冬					寒い		海藻が寄る 作業に良くない
コチ オーゴチ ドヨーゴチ ﾐﾀﾗｲｺﾞﾁ	強い 強い			御手洗		雨が近い 晴天	涼しい	波のうねり大 海が青い	海藻があがる
マジ アサマジ ヨマジ デアラシ ＊ﾄｰｼﾞﾝﾎﾞｰ ヤマジ オーヤマジ サクラマジ	6月は強 強い 特に強い	春に多い 麦の時期 春先	一日で凪ぐ 朝 夜 朝	山から 山から		晴天 雨が近い 台風に伴	暖かい 暖かい		芋の苗を枯らす 注0 注0 アサマジのこと 麦を倒す。悪い 被害が大きい 被害が大きい 植物の芽を出す
マジニシ									聞いたことあり
ニシ ｺﾞｶﾞﾂﾉ ｻﾆｼ （ﾀﾆｼ）		田植え時 5月頃				雨を伴う		裏が荒れる 荒れる、注1	苗が植わらない
アナジ		冬に多い			下から		寒い		
キタアナジ		冬に多い					寒い		
ﾊﾙｲﾁﾊﾞﾝ		春先							

注0　アサマジワ　ヒヨリノ　カミサン、ヨマジワ　ヒヨリソコナイ。
注1　ゴガツノ　サニシニ　モドラヌ　フネワ　ドコノ　オヤマガ　トメタヤラ。（五月の田西に戻ってこない船は、どこのお山｛遊郭の遊女のこと｝が止めたのやら）　船乗りの奥さんが言う。宮盛には昔、船乗りも多かった。昭和初期までは三本マストの帆船で、九州・大阪間の石炭輸送などを行っていた。
注＊　トージンボーの由来は以下の通り。
「昔、戦に負けた武士が宮盛に逃げ込んできた。村人はそれを隠さず、追ってきた敵の武士にそのことを教えた。武士は敵の武士に殺され、殺されるとき村人達を恨んで『自分が隠れていたことを知らせた怨みに、毎年麦のできる頃に強風を吹かせ、麦を倒して麦を食べられなくしてやる』と言ったという。トージンボーは、その風である」
　トージンボーの名前は人名かどうかははっきりしないが、伝説があるという。

表3　大長の農業従事者の風位語彙（教示者別）

■ A 氏の風位語彙

７３歳。
元農業従事。蜜柑づくりを行っていた。出作をおこなっており、大崎上島の大崎町内及び外表に畑を所有していた。ほぼ毎日のように出かけていた。
若い頃は櫓船。戦後から動力船に変わった。櫓船のころは、風向きによっては帆をまいて走った。秋頃は夕方から風が北にかわるので、帰りは帆走が可能になり、便利であった。行きはマジが吹くと帆走できたが、マジは主に午後の風であり、櫓を押していくことの方が多かった。

語　形	強弱	季節	時間帯	方位	高度	天候	寒暖	海の状態	生活意味
キタ アサギタ オーギタ アオギタ	 強い 強い	秋～冬 ９月頃 9～10月 9～10月	夕方 早朝				寒い	荒れる 海が青い 海が青い	帰路、帆走可。 櫓船は難儀。
キタゴチ	強い					台風の風		荒れる	昔は危険な風。
コチ オーゴチ ドヨーゴチ タトエゴチ	強い	夏の土用				雨が近い 雨が近い		ｲｷﾞｽが生える 潮が満ちる時	
ヤマジゴチ									
ミナミカゼ ヤマジ									
ﾅﾝｾｰﾉｶｾﾞ マジ ヨマジ サクラマジ	微風	夏の土用 桜の時期	午後に多い 夜			季節風の変化	暖かい		
タカマジ				北がかる					
ニシ ｺﾞｶﾞﾂﾉﾀﾆｼ		梅雨・秋 ５月				梅雨近し			大崎上島では田植えの時期
ホクセー アナジ		冬 冬						荒れる 荒れる	
ハヤテ ﾊﾙｲﾁﾊﾞﾝ	突風	梅雨 春		西が多い				危険	

■ B 氏の風位語彙

７１歳。女性。
大長生まれ、大長育ち。農業を行い、柑橘以外にも桃やさつまいもなどを作っていた。出作を行い、愛媛県横島、大崎上島木江町沖浦付近に畑を所有していた。
横島は小さい島で、どのような風がきても風をまともに受けるため、風が強いのは歓迎すべきことではない。また、南西向きの畑を所有しており、マジが吹くと影響を受けた。
若い頃はまだ櫓船であり、約１時間漕いで、大崎上島に渡っていた。
なお、調査時は同席者あり。８０歳の女性で、大長出身。この方もまた、渡り作を行い、大崎上島へ渡っていた。

語　形	強弱	季節	時間帯	方位	高度	天候	寒暖	海の状態	生活意味
キタ	強い	秋～冬					寒い	荒れる	弱い風なら帰路帆走可能。
アキギタ オーギタ	強い	秋				雨が近い	寒い	荒れる	船を出せない。
キタゴチ						雨が近い	寒い		昔は危険な風。
コチ マゴチ ドヨーゴチ	強くなる	土用		真東		雨が近い		後に荒れる	この風の後は船を出せない。
タトエゴチ ノボリ	強くなる					雨が近い		潮が引くと強	追い風になる。
ナントー ヤマジゴチ ﾐﾀﾗｲｺﾞﾁ						雨が近い			あまり知らない
ミナミ ヤマジ	強い	春							
ナンセー マジ オーマジ	強い	春～秋口	一日で凪ぐ				暖かい		畑に被害。 帆走も危険。
ヨマジ ハエ	強い	春～秋口 ５月	夜	西～南西		翌日晴天		荒れる 海が青くなる	危険。
ﾊﾙｲﾁﾊﾞﾝ	強い	春先							
ニシ ｺﾞｶﾞﾂﾉﾀﾆｼ	強い	５月				雨を運ぶ			作業にはﾏｲﾅｽ。
ニシアナジ	強い							荒れる	
アナジ	強い	秋～冬	８日間続く				寒い	荒れる	船を出せない。
キタアナジ		冬					寒い	荒れる	
カワセ ツムジカゼ	強い	５月・秋		風向変化 風向変化					

■ C 氏の風位語彙

６４歳。男性。
大長生まれ、大長育ち。
農業従事。渡り作を今も行う。大長の前にある愛媛県関前村岡村島と、大崎上島大崎町大串に、農船で通っている。

語　形	強弱	季節	時間帯	方位	高度	天候	寒暖	海の状態	生活意味
キタ アサギタ オーギタ ヨギタ	強い	冬が主	早朝 夜				寒い	波が高い 波が高い	船を出せない 船を出せない
キタゴチ									
コチ オーゴチ ドヨーゴチ	強い	土用				凪ぐと雨			恐ろしくない
ヤマジゴチ	強くない					台風に多			上島へは追い風
マジ タカマジ	強い		一日で凪ぐ			変化			向かい風だが、恐れはしない
マジニシ									帰路は向かい風
ニシ ｺﾞｶﾞﾂﾉﾀﾆｼ		5月				雨が多い	寒い		
アナジ		冬	8日も続く					荒れる	八木灘へ出せない
キタアナジ		冬						荒れる	船を出せない
フキオロシ ﾊﾙｲﾁﾊﾞﾝ ハヤテ	強い 突風	初春 梅雨時期		マジ多し マジ多し	山から	雨になる			危険

■ D 氏の風位語彙

８２歳。男性。
大長生まれ、大長育ち。外住歴は、尋常小学校卒業後の、松山の農学校の在学中３年間と、兵役で山口県徳山市へ行った２年間である。
農業従事。渡り作を行うが、大長の目の前にある中島（大島とも）と、沖友周辺に畑を所有し、農船で通った。しかし、距離的に近いことで、風位語彙にはあまり関心がない。

語　形	強弱	季節	時間帯	方位	高度	天候	寒暖	海の状態	生活意味
キタ オーギタ	強い	冬に多い					寒い 寒い	八木灘が荒れる 荒れる	蜜柑作りにはよくない。 遠くへ行く人は船を出せない。
キタゴチ				北寄り					
コチ						雨が近い			関前灘が荒れる 沖友へ行けない
ヤマジ									
マジ ヨマジ			夜				暖かい		
ニシ タニシ									冬の西は悪い。
アナジ								荒れる	
キタアナジ									
ﾊﾙｲﾁﾊﾞﾝ	強い	春							

○ワシラ　アノー　カゼヤナンカノ゛コト、ワネー　ヤランカラ　ネー、ノッテ　シゴト　ムコー　イッタリ　スル　ヒトワ　キオツケテ　ネー、カゼガ　ドーヤラ　ヨー　イヨッタケド。ワシラ　アンマリ　トークエ　デンカラ。（私たちは、あの、風なんかのこと、船をやらないからねえ、〔船に〕乗って仕事〔をしに〕向こう〔大崎上島のこと〕へ行ったりする人は気をつけてねえ、風がどうだと言ったりしていたけれど。私たちはあんまり遠くへ出ないから。）
注：船をやらない、というのは、船で遠くへ出ない、の意。
○ワシ　ミカンズクリデ　ネー、ソコ　カイソーテンノ　ネー、マエニ　コマイ　シマガ　アルンダガ　ナカジマダケン　ソコデテ　ツット、チカダロー。（私は蜜柑作り〔をやっていて〕ねえ、そこ、回漕店〔現在、大長港のある場所〕のねえ、前に小さい島があるのだが、〔そこが〕中島だから、そこ〔農用船の停泊している大長の堀のこと〕をでて、つっと〔すぐ行ったところだ〕。〔瀬戸の〕中だろう。〔だから風にはあまり関心がない。〕）